

## [48] ゲーテ生誕250周年 ワイマールEUフェスタ

### ～竹屋啓子コンテンポラリー・ダンス・カンパニー～

1999年9月17日 東京新聞 夕刊

ゲーテはフランクフルトの名家に生まれたが、東のライプツィヒの大学に学び、生涯の大半をワイマール公国の宰相として過ごした。ワイマール市の近くには中世吟遊詩人の歌合戦が行われたワルトブルグ城や、古いゴシックの聖堂などもある。バツハが活躍したのもこのあたりだ。緑深い山ふところに包まれたこの地方は、いわばドイツ文化のふるさとなのだ。東西ドイツが統一する以前は、西の人々は訪れることができなかった。そういうこともあって今、この地がヨーロッパの人々の関心を集めている。

EUフェスティバルが今年のカンパニーに決めたのも同じ理由だろう。芸術関係の世界フェスティバルは夏のバカンス・シーズンに開かれるものが多いが、このEUフェスティバルは毎年毎に場所を移し、年間を通じて世界からさまざまな芸術団体が招かれて公演を行う。今年、ダンスの分野で参加したのはベジャール、ノイマイヤー、エイフンマンのカンパニー、そして東京バレエ団など。

そのEUフェスティバルに、この八月、日本の竹屋啓子コンテンポラリー・ダンス・カンパニーが招かれた。カンパニーにとっては初のヨーロッパ公演である。

## [48] ゲーテ生誕250周年 ワイマールEUフェスタ

### ～竹屋啓子コンテンプラリー・ダンス・カンパニー～

1999年9月17日 東京新聞 夕刊

このグループを選んだ理由について、主催者側のジーベルト氏は「西洋的なものとアジア的なものとの混合」だと語る。単なる伝統の誇示も、また西洋文化の追従も、どちらも今の日本の真実ではないという認識に立ってのことだろう。

その思いは竹屋啓子自身にとっても同じである。彼女が今から六年前、東南アジアのアーティストと共同して「ダンス東風<sup>とんぷう</sup>」というテーマで追求し始めたのは、自分が根づいている風土だった。その風土のことを、西洋から入ってきたモダン・ダンスの教育を受けた彼女は何も知らないと感じていた。自分が属している文化の根を探る、その思いは今年ワイマールを訪れた人々と変わらない。

さて今回のAプロはインドネシアの宗教的な宮廷音楽ガムランを使った『東風―風の足跡、息の石』（玉井輝・台本、竹屋啓子・構成振付）。Bプロは今世紀初頭のソプラノ、ファニーラーが歌う有名なアリアにソロ・ダンスを合わせた『アリア9』（佐藤信・台本、関雅子ほか・振付）と、心の荒廃した現代日本でわらべ唄や運動会を追憶する『天使の迷路』（竹屋啓子・構成振付）の二演目である。公演が行われたのはその名も「家畜競売会場」。といってもその目的で使われたことは一度もなく、

## [48] ゲーテ生誕250周年 ワイマールEUフェスタ

### ～竹屋啓子コンテンツポラリー・ダンス・カンパニー～

1999年9月17日 東京新聞 夕刊

ヒトラーの時代にもソ連の時代にも、軍事施設だったそうだ。壁にはロシア語の落書きもあって、歴史の爪跡を感じさせる。大きな船底を伏せたような木組みの天井が暗がりには浮かび上がると、一種ふしぎな趣だ。

おもしろかったのは、意外な場面で「日本」を感じたこと。『天使の迷路』のなかの遊び唄はいいようもなく神秘的な雰囲気だし、短い脚に白いブルマーの運動会にいたっては衝撃的。こんな強烈なもの、ヨーロッパのどこを探しても見当たらない。

手応えはあった。いや、むしろ過剰だった。観客はおそらく大半が土地の人、加えて西ドイツやヨーロッパ各地からの観光客だと思うのだが、開場の時点からすこぶる生まじめな様子で、『アリア9』と『天使の迷路』に対しては底力のある拍手。まずまず妥当と思っていたところ、『東風』では途中で足音も高く帰ってしまう人がいる。そのくせ終わった時にはブラヴォーに口笛、床を踏みならしたあげくが総立ちの拍手になった。日本でこれほど激しい喝采を浴びたことのない出演者たちは途方に暮れたのか、まるで叱られたような表情で立ちつくしていた。